

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 13 日現在

機関番号：15501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520387

研究課題名(和文) ホロコーストの生存者の日記、回想と作品 — 子供と青少年を中心に

研究課題名(英文) Survivors of the Holocaust in Diaries, Memoires and Artwork. In Particular Children and Youths.

研究代表者

F・V・U Dobra (Dobra, Felicitas)

山口大学・大学教育機構・教授

研究者番号：30403645

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円、(間接経費) 480,000円

研究成果の概要(和文)：2003年から2009年にかけてホロコーストにおける子供たちというテーマに従事した。初期には生き残らなかった子供たちについても書いた。逃亡状態や収容所において生き残れることは保証されていなかったということは忘れられてはならない。生き残った人々は彼らの回想録や編集された日記を死んだ家族や友に捧げたが、それは後世の人々がその人たちの名前を忘れないようにするためである。
この研究はナチスのイデオロギーに影響され、また不安に陥った当時の追従者や子供たちの意見をも示す。最後に日本の(大学での)ホロコーストの扱いについての短い見通しも与える。

研究成果の概要(英文)：By writing memoirs and diaries, the young writers became important witnesses of the Shoah, who can disprove the Holocaust deniers and reported how they were fighting against the victimisation. The young survivors were very lucky, but we must never lose sight of the fact that survival in hiding or in camps was not guaranteed and the majority perished in the Shoah.
Research should also show opinions of former bystanders and show that the children of the German society were affected by the ideological infiltration of the Nazis.
Finally, it should give a brief outlook on the treatment of the Holocaust at Japanese Universities. The message given by the young survivors should show, that we should take responsibility, and create a culture which remembers what happened and how to learn in our present world from the mistakes of the past so that the history will never be repeated again.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学

キーワード：ホロコースト ユダヤ人 迫害 潜伏 ドイツ チェコ ハンガリー フランス

1. 研究開始当初の背景

(1) 少数の人々は戦争直後か、戦後 30 年のうちに回想録を書いた。大多数の生き残った子供たちと若者たちは第二次大戦後 45 年たって初めて回想録を書くことを決断したが、それは彼らの子供たちからトラウマ的体験を引き離すためである。しかし彼らの子供たちは十代になった時に彼らの親たちに過去のことを尋ねたのであった。幾人かの子供たちは親の死後その生を調査した。ここから以下の私のテーゼが生じる。すなわち、日記と回想録を書き出版することは、生き残らなかった、あるいは生き残りはしたものの非常に遅くその体験を語ろうとした、あるいはまったく語ろうとしなかった子供たちの運命について光を投げかけるというテーゼである。

(2) 1980 年代と 90 年代にホロコーストの時代を生き延びたことを主題とする回想録が編集された。これは様々な仕方で開催した。多くの生き残った人々にとって、彼らの破壊された生を語ることは、彼らがこうむった不当を後世に語り継ぎ、抑圧された魂の体験を自らに語るという療法的な意味を持っていた。しかしこれは彼らがこうした体験を忘れることができたということの意味するものではない。生き残ったほかの人々はその時代についての真実を語り、今の世代を他の時代と現在との対決へと向かわせようとする。文学作品と体験報告との間に差異があるのは言うまでもない。すべての日記と回想録の文学的内容について判定することは、この研究の課題たりえない。いずれにせよ彼らは、かの時代を思い出すためだけでなく、今日生きている人々がそこから結論を出すためにも重要な時代の証言者である。

(3) この研究は当時若かった著者たちに共通の体験と感覚を比較する分析であり、ホロコーストは否定できない事実であったことを証明するためのものである。第二次世界大戦後に生まれた我々にとってのメッセージは、我々は硬直した罪の意識において戦争世代の罪を引き受けるのではなく、(2)において述べたように責任を引き受け、すべての懸念を含む、過去の過ちを繰り返さないためにそれを学ばねばならないというほかの創造的な回想文化を作ることである。

2. 研究の目的

(1) この研究は加害者側の人間が、命令に基づいて苦境に陥り、その人格が分裂すること(アメリカの心理学者 R. J. リフトンは「ダブリング」について語っている)によって、他の人間に対して何をなしうるかを示した。このいわゆる「命令に基づく苦境的状況」のもとで、加害者はユダヤ人、ジプシー、アフリカ系ドイツ人やほかの民族をドイツ社会から孤立させ、迫害し、追跡し、連行し、医学的な実験台として扱い、加害者側の人間によってつくられた収容所で殺した。

ナチスの追隨者たちも精神分裂的になった。彼らは全体主義的な体制によって抑圧され、部分的に次のような立場を展開した。「私は本来ナチには反対だが、私に何ができよう。ナチの方が強い。戸外で自分の意見を述べることはできない。」

(2) 人が収容所での拷問や逃亡で生き残ったとしても、それは最終的には偶然だった。その時代に生が偶然と個別的人間に依存していたことは、該当者が日常直面していた悲劇だった。

この研究は日記、画、体験された時代の後に書かれた回想録の執筆の動機を紹介する。該当者を引用することで子供たちと若者たちの抑圧された立場が明らかにされる。

また、かの時代の状況への見通しと現代との比較を引き出す。その後歴史の繰り返しをどう回避できるかという問いが立てられる。

この研究では、きわめて少なかった援助者も示唆される。

- (3) 日記、回想録、映画(ドキュメンタリー映画も含む)のリストは、大学での授業のための資料としてのこうした資料の収集を強調する。日本語への翻訳、とりわけ日本語字幕を作成することが必要である。

このテーマは本来はより長期的な研究に適するものであるが、現在のところ残念ながらそれは用意のできている状況ではない。

3. 研究の方法

- (1) 最初の年に資料を集めた。当然のことながら資料は毎年絶えず拡張される。写真や書かれたもの、さらなる日記といった資料を集めるために、私は2011年にプラハ、ブダペスト、フランクフルトの博物館や図書館で作業した。また本を買い、過去と現在のユダヤ人の場所を写真に収めた。

2年目の年である2012年には、テレージェンシュタット、プラハ、フランクフルトのゲーテ大学のフリッツ・パウアー研究所で更なる資料を集めた。

- (2) 1933年から1945年の間に子供もしくは若者であったユダヤ系および非ユダヤ系のドイツ人の意見を集めた。それに

ついてライブチヒの学校博物館とユダヤ人団体で活動中の記念プロジェクトを見つけた。

3年目の2013年にはテレージェンシュタットの図書館と写真資料館で1941年から1945年までの逮捕者の生の資料を捜した。そして展示において、子供と若者も結びついていて、テレージェンシュタットでの芸術的な生についての情報を見つけた。

フランクフルトでもう一度日記と回想録について作業し、ユダヤ人博物館の教育センターを訪れた。

パリの「ホロコースト博物館 Memorial de la Shoah」において新しいアспектが生じた。そこでも図書館で作業し、重要な本とシリーズを発見した。このほかに写真を選び、本を購入した。

4. 研究成果

日記、回想録、画の研究は実例を挙げて、ユダヤ人市民を排斥し、名誉を棄損し、ゲッターあるいは「ユダヤハウス」へと集め、彼らを(処刑場のある)収容所へと送るナチスの方法を発見した。

しかし、子供や若者も含まれていた被害者が不確実な未来のために学び、創造的に働いたという事実もまた、彼らが単に被害者の役割に甘んじなかったということを示している。被害者たちは犯罪者の考えに反して自らを被害者とはみなさず、被害者としての役割に対して戦った。大多数の著者は麗しい子供時代または青年時代を持っていたが、そこから突然引き裂かれたのである。この少年時代および青年時代は彼らに生き残るための力を与えた。この子供や若者たちは新たなる状況の中で、危険を回避する術をできるだけ早く学んだ。彼らはしばしば目の前で起こったことを真実とは感じず、あるいは生き残るための

冒険と感じた。

こうした戦略は彼らが解放された後で初めて心的外傷後ストレス障害という形に帰結した。逃亡に成功した若者たちはその隠れ場を頻繁に変えた。多くの人々は（ナチスの施設やゲシュタポセンターといった）危険な場所が隠れ家として最も安全だと考えた。なぜなら誰もユダヤ人がそんなところにいるとは考えなかったから。

彼らとその親兄弟、あるいは友達とともに連行された時には、お互いに助け合った。両親と子供の間、あるいは兄弟と友達の間、その役割の変化もしばしば起こった。そして幸運な時にはそれによって弱者の命が救われた。親しい人が死に瀕しているときには、他の人がその人を助けた。しかし生き残ることは保証されてはおらず、多くの子供や若者たちは親しい人々が死ぬのを見たし、他の若者たちは親しい人から引き離され、親しい人々がまだ生きているかわからなかった。戦争がいつ終わるかは予想がつかなかった。

しかし子供たちは自分自身が予想しなかった力を発揮し、テレージエンシュタットのように芸術家や学者の導きのもとに画を描き、学び、日記を書き、演劇を演じることで、絶望的な状況にもかかわらず彼らの将来を信じ、学び、そして創造的に活動した。また自力で、あるいは親とともに日記を書いた。

解放された時には、多くの生き残った人々は幻滅感と虚無感を持った。彼らが自分の家にまだ住めるのか、だれが生き残っているのかといったことが分からないことが、新たな心配の種となった。彼らの家には見知らぬ人が住んでおり、信頼して任せておいた財産は隣人によって盗まれているといったことがしばしば生じた。多くの家族は生き残ってはいなかった。ユダヤ人排斥運動はなお残っていた。

研究の結果は子供時代にナチスおよびナチスに操作された子供によって差別された一人の非ユダヤ系ドイツ人の日記によって確かめられた。この若者は本来常にもそのドイツ人の学校仲間、後にはナチ時代のドイツ人社会に帰属しようとした。しかしながらその時代の自分自身の悪化し続ける経験によって次第に、彼の運命がその黒い肌の色によってユダヤの若者と共有され、ユダヤ人の母と非ユダヤ人の父を持つ若い男の忠告によってギリギリで隠れることができたことを知った。後者の若い男も回想録を書き、両者の回想録は映画化された。

これらの回想録は読者に、若者の操作や虐待が、非現実的な敵のイメージを示唆し、差別し孤立させることによって、全体主義のイデオロギーを通して示す危険性を伝える。

研究の対象となった回想録は大抵英語で出版された。少しのものはまずドイツ語で書かれ、二つは著者自身によって英語からドイツ語へと翻訳された。というのも彼ら自身がドイツ語テキストに責任あると感じたからである。生き残った人々をはじめはドイツ語を犯罪者の言語だと感じた。一部の人は二度とドイツ語を話さなかった。他の人々にとってドイツ語は詩人と思想家の言語であって、ナチスの言語ではなかった。他の人々はその回想録を紹介し、若い人々にアクティブな回想をもたらすために、再びドイツ語を使い始めた。

この研究は日記と回想録の著者を歴史の重要な証人、として、また「オーラルヒストリー」特に「パーソナルヒストリー」の証人として紹介する。多くの著者と画家の個人的なメッセージは以下の限りにおいてである。すなわちお互いに話し合い、違う考えを持った人々に寛容でなければならず、暴力は拒否されねばならず、市民

の勇気が今日もなお展開されねばならないことに各人が責任を持つことで、歴史が繰り返されてはならないことが理解される限りにおいてである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

F.V.U Dobra、Memoiren, Tagebücher und Briefe von Kindern und Jugendlichen, die während der Shoah gelebt haben、山口大学独仏文学第35号、pp1 - 24、2013年、査読無

〔学会発表〕(計1件)

F.V.U Dobra、Memoiren und Tagebücher von Kindern und Jugendlichen, die den Holocaust überlebt haben、日本独文学会西日本支部大会、2012年12月2日、福岡大学(福岡県福岡市)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

F.V.U Dobra (Dobra Felicitas)

山口大学・大学教育機構・教授

研究者番号：30403645